



Title	南宋士大夫とその文学に関する研究―「郷里」との結びつきに着目して―
Author(s)	岑, 天翔
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105366
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名（ 岑 天 翔 ）	
論文題名	南宋士大夫とその文学に関する研究 —「郷里」との結びつきに着目して—
論文内容の要旨	
本論文は、「郷里」との結びつきという視点から、南宋士大夫とその文学をめぐる諸相を総合的に検討したものである。全体は八章からなり、400字詰め原稿用紙換算で約650頁の論文である。 第一章「北宋末における『八行取士』の再考——中国最後の『郷挙里選』」では、南宋士大夫が直面した歴史的状況を把握するために、北宋末に実施された「八行取士」を中心として、唐宋期における士大夫と「郷里」との結びつきを再構築しようとする政治改革とその挫折の過程を整理した。隋唐以降、士大夫とその母体である「郷里」との結びつきは、制度的・社会的構造の変動の中で深刻な断絶を迎えた。この断絶は多方面にわたる社会的問題を惹起し、政治史・思想史上の重要な課題として、唐・北宋期の士大夫に反省と改革の試行を促した。とりわけ彼らは、制度改革を主要な手段と位置づけ、科挙制の廃止や「郷挙里選」の復興を通じて、士大夫と「郷里」との関係再建を図ろうとしたのである。北宋末に施行された「八行取士」は、まさにその思想的延長線上に位置づけられる最後の試みであったが、複合的な要因によって挫折に終わった。こうした改革の挫折を経て、南宋士大夫は前代の改革路線の限界を明確に認識するに至り、科挙制の存続を前提としつつ、士大夫自身の主体的な営為によって「郷里」との結びつきを再構築しようとする方向へと転じていったのである。 第二章「南宋官僚士大夫の郷居風潮について」では、南宋期に顕著となる士大夫の郷居風潮を取り上げ、その実態と制度的背景を個別事例に基づいて分析した。唐・北宋期の士大夫がしばしば「寄居」や「徙居」を選択していたのとは対照的に、南宋期に入ると、士大夫は在官期間であっても頻繁に故郷へ戻って長期にわたり滞在するようになり、さらに致仕後には郷里に定住することが一般化した。いわば「郷居」は、南宋士大夫に広く共有される生活経験となったのである。こうした郷居の広がりに伴い、士大夫と「郷里」との結びつきは密接となり、彼らが郷里社会において多様な営為を展開することが可能となった。 第三章「楊万里と一二〇一年江西吉州和糴蠲免の事件——詩文制作、ネットワーク、および郷居士大夫の『権力』」では、南宋期に郷里へ退いた士大夫が具体的にいかなる営為を展開していたのか、という問いを扱う。地方誌・詩文・書簡など多様な史料を用いて嘉泰元年（1201）に吉州で発生した和糴蠲免事件の経緯を復元し、その中で楊万里が果たした役割を検討した。郷里に退居していた楊万里は、この事件に深く関与し、淮西・湖広総領に私的書簡を送付して斡旋を試みることで、最終的に吉州地域における和糴の蠲免を実現させた。この事例が示すとおり、楊万里のような士大夫は、たとえ郷里に退いた後であっても、なお朝廷の高官と良好な私的関係を保ち、複雑かつ重層的な人的ネットワークを運営していた。また、彼は関係者のために詩・碑記・墓誌銘・序跋など多様な詩文テキストを制作することで、このネットワークを維持・強化していたのである。こうして築かれたネットワークこそが、彼が郷里社会の利益のために陳情し、社会的影響力を行使するうえでの重要な枠組みとなった。 以上の議論からも明らかであるように、詩文制作は士大夫の日常的な交流・営為においてきわめて重要な位置を占めていた。こうした視点を踏まえ、第四章「楊万里の墓誌銘執筆について——在地士人と『郷論』」では、楊万里による墓誌銘の執筆活動についてさらに検討した。社会史的な統計手法を用いてその執筆対象を分析し、そこに顕著な「在地化」および「無官化」の特徴が認められることを指摘した。これは北宋期の士大夫が主として朝廷官員のために墓誌銘を撰するという一般的傾向とは明らかな対照をなしている。この相違は、南宋士大夫が退居後の郷里において、従来とは異なる史料・テキスト生産のメカニズムを形成していたことを示唆する。すなわち彼らは、自身の社会的立場や人的ネットワークを背景として、地域社会と密接に関わる多様な史料・テキストを大量に生み出し、在地士人が救済、公共事業、自主的仲裁などの地域的営為に携わる姿を意識的に浮かび上がらせていたのである。 第五章「南宋時代における『郷論』について——詩文制作と文化権力」では、前章で触れたように郷居士大夫による執筆活動が郷里社会において「郷論」として機能していた点を踏まえ、南宋期に広く見られた「郷論」あるいはそ	

れに類する人物評価をさらに検討した。江西吉州の事例に基づき、「郷論」の形態およびその主導者と評価対象を分析した結果、南宋期の「郷論」は主としてテキスト化された形で郷里空間に流通し、その生産を主導したのは郷里に退いた士大夫層であり、評価の対象は無官の在地士人、とりわけ新興の士人層であったことが明らかとなった。こうした構図からすれば、「郷論」とは郷居士大夫が文化的資源を掌握し、郷里社会内部における身分秩序や価値体系を再生産する仕組みとして機能していたと理解できる。

南宋期の士大夫は、中央官界を離れて郷里へ戻った後、主体的な姿勢で郷里社会秩序の再建に関与したが、その中でも「郷論」の提唱と実践はその中核をなす営為の一つであった。ここには、士人個人の名望や社会的地位、さらには一族の利害を、単に国家権力によって付与される公式的権威（官職・科挙功名など）に依拠させるのではなく、むしろ郷里共同体の内部で形成される評価体系——一種の「コミュニティ・コンセンサス（Community Consensus）」に類する仕組み——へと結びつけようとする動きが認められる。こうした、いわば「郷論主義」と呼び得る思考と実践によって、科挙制を維持しつつも、士人一族と「郷里」との関係は改めて再構築されていたのである。

さらに、文学作品の生産・受容・伝承の主体でもある南宋士大夫にとって、中央官界から郷里への「圏域」転換は、その文学活動の在り方にも少なからぬ変容をもたらした。この変化は南宋文学、ひいては前近代文学の全体像の理解にも影響を及ぼすものである。本論文では、「郷里」という空間に身を置いた南宋士大夫が形成した独自の心情・内面、およびその創作態度や詩学認識に見られる新たな動向についても検討を加えた。

第六章「唐宋文人士大夫の『閑』と『忙』および作詩活動——『偷閑』・『長閑』・『無事忙』」では、唐宋文人士大夫が異なる「圏域」に身を置くことによって、いかにして彼らの「閑」および「忙」の認識と文学的表現が形成されたのかを考察した。官僚生活に取り巻かれる中で、士大夫はしばしば「偷閑」という語を用い、束の間の閑暇を能動的に獲得しようとする主体的姿勢を示す。その一方で、その背後には時間的切迫や倫理的葛藤もうかがえる。これに対し、官界を離れて郷里に退居すると、彼らは「長閑」を自己表現の中心に据え、時間の有限性に縛られる緊張感から解放された後の余裕と安定を強調するようになる。しかし、この「閑」にも負の側面があり、過剰な閑暇がもたらす持て余す時間体験や退屈・煩悶が生じ、閑暇そのものが積極的に「破り除く」べき対象として捉えられる場合もあった。そのため、士大夫たちは「閑中忙有り」あるいは「無事の忙」といった状態を意図的に作り出すことで、過剰な閑暇に抗おうとしたのである。

こうした「無事の忙」のもとで、作詩は従来担っていた社会政治的役割や精神的意義から逸脱し、単に日々の時間を費やし、閑暇を破り除くための「日常的」な営為へと変貌を遂げた。この変化は、南宋文人における創作態度と詩学認識の深層的転換を如実に示すものであり、宋詩の「日常性」を再検討するための新たな視点を提供するものである。

第七章「唐宋期における『詩思』をめぐる認識の変容——『灞橋』モデルとその解体」では、唐宋時代において詩歌創作を支えた根幹的な概念である「詩思」をめぐる表現と認識に注目した。晩唐から北宋にかけては、「詩思は灞橋の風雪の中、驢子の上に在り」という説に象徴されるように、非日常的で劇的な風物や場面が詩思生成の必要条件とされる傾向が顕著であった。しかし、陸游をはじめとする南宋士大夫は、この「灞橋」モデルを意識的に解体し、日常的でありふれた身近な風物や場面からも詩思が喚起され得ると主張した。また、彼らの郷居期の作品においては、詩思が世界のあらゆる場所に遍在するという認識が繰り返し表現されている。こうした詩思の捉え方は、従来の固定的観念を打破し、作詩という行為そのものをことさらに構える特別な営みとするのではなく、むしろ極めて日常的でありふれた営みとして再定位する新たな姿勢を示している。

第八章「『縦筆』から見た宋代文人の作詩姿勢——陸游を中心に」では、「詩の制作過程を制御すべきか否か」という観点から、宋代以前における作詩姿勢の系譜を整理したうえで、陸游をはじめとする宋代文人が好んで用いた「縦筆」・「信筆」・「取次成」などの表現を検討した。そこから、詩の制作過程において人為的な制御・操作を放棄し、詩が自然かつ自発的に生まれるにまかせるという宋人独自の作詩姿勢と詩学認識を明らかにした。また、こうした態度は、南宋士大夫が「郷里」という場に戻って得た「閑」の生活、そしてそれに伴う内面的な安定と余裕と深く結びついていることも指摘した。

以上の検討を通じて、本論文は南宋士大夫とその文学をめぐる諸相を、「郷里」との結びつきという観点から多面的に描き出した。対象とした領域は必ずしも網羅的ではないものの、代表的な課題に対して精緻な分析を重ねることにより、南宋士大夫の行動様式と文学的営為の実像を一定程度明らかにし得るものとなった。また、南宋期は中国近世社会の歴史的展開における重要な起点をなす存在であり、「南宋—元—明」移行期における社会変容の連続性、とりわけ明代に顕著な存在感を示す「郷紳」層の形成を理解するうえでも、本研究が重要な基礎を定めた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (岑 天翔)	
論文審査担当者	(職) 氏 名
	主 査 大阪大学 教授 浅見洋二
	副 査 大阪大学 教授 辛賢
	副 査 大阪大学 准教授 林暁光
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 南宋士大夫とその文学に関する研究 ―「郷里」との結びつきに着目して―

学位申請者 岑 天翔

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 浅見洋二

副査 大阪大学教授 辛賢

副査 大阪大学准教授 林暁光

【論文内容の要旨】

本論文は、南宋士大夫とその文学について「郷里」＝郷村社会との関連のもとに多角的に考察を加えたものである。全体は序章・終章のほか三編八章からなる。

第一章・第二章は「制度」編。南宋士大夫と「郷里」との関係について、主に社会制度の面から考察する。第一章「北宋末における『八行取士』の再考――中国最後の『郷挙里選』」は、北宋末に実施された「八行取士」制度を切り口にして、唐宋期における士大夫と「郷里」との結びつきを再構築しようとする政治改革とその挫折の過程を分析する。それによって、南宋士大夫が前代の改革路線の限界を認め、科举制の存続を前提としつつ、士大夫自身の主体的な営為によって「郷里」との結びつきを再構築する方向へと転じたことを明らかにする。

第二章「南宋官僚士大夫の郷居風潮について」は、南宋期の士大夫に顕著となる郷居の風潮について、多くの個別事例を地域別・宗族別に整理し分析することにより、その実態と制度的背景の諸相を明らかにする。

第三章・第四章・第五章は「地域」編。南宋士大夫の「郷里」の地域社会における文学的営為について考察する。第三章「楊万里と一二〇一年江西吉州和糴蠲免の事件――詩文制作、ネットワーク、および郷居士大夫の『権力』」は、江西吉州に生じた和糴蠲免事件について、地方誌・詩文・書簡など多様な史料を用いてその経緯を復元し、そのなかで文人楊万里が果たした役割を検討する。それによって、楊万里が詩・碑記・墓誌銘・序跋など多様な詩文テキストを制作することを通して地域社会のネットワークを形成していたこと、またこのネットワークを通して郷里社会の利益のために行動していたことを明らかにする。

第四章「楊万里の墓誌銘執筆について――在地士人と『郷論』」は、南宋士大夫の地域社会における文学的営為の一環をなすものとして、楊万里の墓誌銘に焦点を当てて考察する。楊万里の墓誌銘の執筆対象を網羅的に分析し、そこに顕著な「在地化」および「無官化」の特徴が認められることを指摘する。

第五章「南宋時代における『郷論』について――詩文制作と文化権力」は、南宋士大夫の「郷論」に焦点を当てる。江西吉州の事例に基づき、「郷論」の形態およびその主導者と評価対象を分析し、南宋期の「郷論」を主導したのが郷居士大夫層であり、その対象となったのは無官の在地士人、とりわけ新興の士人層であったことを明らかにする。

第六・第七・第八章は「文学」編。南宋士大夫の「郷居」が一般化するのに伴って生じた文学の変容について考察する。第六章「唐宋文人士大夫の『閑』と『忙』および作詩活動――『偷閑』・『長閑』・『無事忙』」は、唐宋期の文人士大夫が「郷里」に身を置くことによって、彼らの「閑」および「忙」に対する認識と表現がいかに変

容したかを考察し、次のような点を指摘する。官界を離れて郷里に退居した士大夫たちは「閑」を自己表現の中心に据え、時間の有限性に縛られる緊張感から解放された後の余裕を享受するようになるが、一方で過剰な閑暇がもたらす退屈に煩悶する。そのため、ときには彼らは「無事の忙」といった状態を意図的に作り出すことで、過剰な閑暇に抗おうとした。この「無事の忙」のもとで、士大夫の作詩行為は日々の閑暇を費消するための「日常的」な営為へと変貌を遂げた。

第七章「唐宋期における『詩思』をめぐる認識の変容——『灞橋』モデルとその解体」は、非日常的で劇的な風物や場面が「詩思」生成の必要条件だとする唐宋期の詩学認識＝「灞橋」モデルの変容を分析し、陸游をはじめとする南宋期の郷居士大夫の詩において「灞橋」モデルが解体され、日常的でありふれた身近な風物や場面からも「詩思」が喚起されるとする新たな認識が作り出されたことを明らかにする。

第八章『縦筆』から見た宋代文人の作詩姿勢——陸游を中心に」は、陸游をはじめとする南宋文人が好んで用いた「縦筆」「信筆」「取次成」などの表現を検討することにより、詩の制作過程において人為的な制御・操作を放棄し、詩が自然かつ自発的に生まれるにまかせようとする新たな文学観の形成過程を明らかにする。それを踏まえて、この文学観が「郷里」における「閑」なる生活とそれに伴う精神的な余裕と深く結びついていたことを指摘する。

【論文審査の結果の要旨】

南宋期の士大夫について「郷里」との関連のもとに考察する研究は、これまでも少なからずなされてきた。本論文はそれを以下の（１）～（４）に述べる点において格段に深化させた研究成果として高く評価できる。

（１）なぜ、士大夫と「郷里」の関係を問題化するのか。この問題意識を明確化するために、本論文の序章において先行する歴史学分野の研究成果を幅広く網羅して整理する。それによって、漢魏六朝から隋唐・北宋を経て南宋に至るまでの中国史の各時代における中国士大夫と郷里社会との関係をめぐる歴史的展開を闡明するとともに、南宋士大夫と「郷里」との関係の独自性を浮き彫りにすることに成功している。

（２）文学研究の方法はさまざまであるが、本論文は歴史学的な研究視点を重視する。特に第一章・第二章は、文学研究よりもむしろ歴史学研究と呼ぶにふさわしい内容となっている。ここにおいて、士大夫と「郷里」との関連は各時代の「制度」と密接不可分であることが幅広い史料を活用することで実証される。「八行取士」制度の存廃が南宋期の士大夫にとって持つ意義は、本論文によって初めて明らかになったと言っていい。

（３）南宋士大夫が「郷里」の地域社会においていかなる役割を果たしていたのか。この種の問題意識に立つ研究はこれまでも少なからず行われてきたが、本論文は郷居士大夫が書きのこした詩文や書簡といった文学性の高いテキストに即した分析を行う点で独創的な価値を有する。第三章の「江西吉州和糴蠲免」に関する分析は、これまで見過ごされてきた事件に光を当てたミクロ・ヒストリー研究の成果としても価値を持つ。

（４）南宋士大夫の郷居生活は、作詩のあり方にいかなる変容をもたらしたのか。従来の郷居士大夫に関する研究では十分に開拓されていない研究領域である。本論文の第六・第七・第八章は、その領域を大きく深く切り拓いた。第六章の「閑」、第七章の「灞橋」モデル、第八章の「縦筆」、いずれも従来誰もが正面から論じようとしなかった問題であり、それを丁寧なテキスト読解を通して論じきった点は極めて高く評価できる。これまで宋詩については「日常性」という特質が指摘されてきたが、それを「郷里」での作詩という観点から再検討しようとする視点は、学界に対してインパクトを与えるであろう。

もちろん、本論文には構成や論述の面で改善を要する点も散見される。だが、それは白璧の微瑕と言うべきであろう。上述の点から見て、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定できる。